コメント

杉村 泰　許容度と選択率の2つの指標から見る日本語研究
――「～てならない」「～てたまらない」「～てしかたがない」を例に

類義表現の使い分けの説明は難しい。特に「どちらも言える」場合が問題である。こうした場合、母語話者に対するアンケート調査が有効だが、質問の仕方によって結果が異なることを意識する必要がある。本論文は、「～てならない」「～てたまらない」「～てしかたがない」を例に、被験者の許容度を見る「○×式正誤判断テスト」と被験者の選択率を見る「多肢選択テスト」の相関を見たものである。調査の結果、「暑くてならない」は許容度はやや高いがあまり選択されず、「暑くてたまらない」の方が自然であることなどが示された。本論文は類義表現の使い分けの基準をより客観的に示すための貴重な方法論を提示したものである。　（I）

井上直美　「～てよこす」の意味・用法
――ぞんざいな印象の正体

やりもらいの類いの動詞群の分析で重要な観点は、まずもって「視点」であり「動作の方向性」だが、これらとともに重要なのが個々の形式の評価的な意味合いであろう。個々の形式に然々の評価的意味の特徴があると言ってしまえばそれまでであるが、筆者はそのメカニズムを明かしている。常に「それがなぜなのか？」と問いかける姿勢がもたらした知見であると言えよう。　（S）

趙 妍姍　接続表現「ばかりに」の意味分析

本論文は、原因・理由を表す「ばかりに」について実証的に分析・考察し、とりたて助詞「ばかり」との関連についても考察したものである。本論文で指摘されている「ばかりに」の特徴のうち、特に「ばかりに」においては前件と後件に「想定や期待から外れており必然性がない」との指摘は興味深い。ただ、こうした説明は、学習者の産出にまで結びつけるには（その必要があるかどうかは検討の余地があるものの）、やや物足りない。こうした質的な記述を充実させるだけでなく、説得力のある量的な分析が望まれる。今後の展開に期待したい。　（M）

松下光宏　接続助詞「ものを」の文脈における用法と事態の特徴

本論文は「休んでいれば治るものを、医者になんか行ったからかえって長引いてしまった。」のような「ものを」について、コーパスから採集した用例に基づき、質的・量的に分析したものである。「PものをQ」において、先行文脈とQがつながる文脈のなかで「Pものを」が「注釈的に挿入されている」との分析が独創的である。ほかにQが出現しない場合の用法や、Pによく出現する語句の調査からPの表す反事実事態を明らかにするとともに、Qの事実事態についても考察を深めている。「のに」とだいたい同じ意味とされてしまう「ものを」の新しい一面が明らかにされている点が注目される。　（M）

古賀悠太郎　話し言葉と書き言葉における動詞受身形の使用実態
――2種類のコーパスの調査から

日常の言語使用の場で「受身」はどのように使われているのか。これは日本語教育のための文法研究にとって重要な観点である。本論文は、話しことばとしてCEJC、書きことばとしてBCCWを対象に受身の使用実態を明らかにしようとしたものである。調査の結果、1）話しことばでは受影受動文が、書きことばでは降格受動文が多い、2）話しことばでは受身は連用節末に現れやすいのに対し、書きことばでは連体節末に現れることが多い、3）話しことばでも書きことばでも動詞は「言う」が最も多いが、動詞全体に占めるその割合は話しことばの方が圧倒的に多いといった差異が抽出された。　（I）

望月雄介・長尾三千代
ベトナム人日本語話者における名詞の不確実性
――留学生と生活者の語りの比較分析

第二言語習得の重要な研究分野に自然言語習得者を対象とするものがある。ある言語を教室で学んだ人と生活場面で身につけた人の習得過程の違いを見るものである。本論文は、ベトナム語話者の教室習得者（留学生）と自然習得者（生活者）を対象に、習得過程の違いを語りでの名詞句の表現の違いをもとに考察したものである。調査の結果、生活者は日本語母語話者と同様に「なんか」などの不確実さを表す表現を多く用いたのに対し、留学生はそうした形式をほとんど使っておらず、その違いは日常生活で日本語に触れる時間の差に由来する可能性が示された。第二言語習得研究の1つの方向性を示唆する好論文である。　（I）

許 亜寧　日中母語話者の「意外な展開」の語りにおける接続表現
――場面別の分析を中心に

英作文の際、たいていの日本人の英文は接続詞が余剰である。書き手の側に文脈を案内する意識が強すぎるのだろうか。日本語が「語り手誘導型」、中国語が「聞き手委ね型」とする、本論文が示す対比は極めて本質的である。おそらく接続詞だけの問題ではないように思う。文法や談話のさまざまな境域に関わる、これからの研究の観点になるはずである。　（S）

昂 燕妮　日本語と中国語の「ほめ」の方法の対照研究
――親疎関係に着目して

中国語をはじめ、さまざまな言語と日本語の会話のストラテジーを考察した論考は少なくない。この研究は、両言語の話者の傾向をネガティブ、ポジティブポライトネスへの指向という単純な対比に陥ることなく、事実を素直に受けとめた好論文である。また、単に言語間の傾向ではなく、親疎関係に着眼している点も高い妥当性が感じられる。　（S）

向井留実子・中村かおり・近藤裕子
レポート・論文作成のための引用指導の課題
――初年次生と大学院生に対する引用箇所判断の調査から

おそらく、著者の日頃の教育の実践の中から生まれてきた問題意識であると思われる。単に規範的な引用のあり方が何かを示すだけでは、限界があるのだろう。本論文は、日本語母語話者、学習者の引用の認知のレベルまで目配りして、問題解決の方向性を探ろうとしている点が秀逸である。是非とも、さらに研究を深化させていただきたいと思う。　（S）

小口悠紀子・帖佐幸樹
初級日本語教科書で「てあげる」はどう扱われているのか

本論文は、「聞き手に不快感を与える」ことが多いとされる初級文法項目「てあげる」について、これからのあるべき扱い方を考えるために、現行の初級教科書の導入・練習と、教科書や指導書に見られる恩着せがましさに対する記述を丁寧に分析した。現行の教科書は、多くが「てあげる」の問題点を意識し、不自然でない使い方を提示する努力をしている点を指摘したところが注目される。使用が危険であるから（初級項目から）排除するというのではなく、学習者が「てあげる」を適切に運用するために必要な文法記述はどのようなものか、という視点の重要性が示された研究である。　（M）

ファム ティ タイン タオ
日本語アスペクト複合動詞の有効な指導方法に関する研究
――ベトナム語母語話者を対象とした実験結果分析に基づいて

複合動詞は、使用頻度が多いにもかかわらず、明確な使用指針が存在せず、学習者にとって習得が困難な項目となっている。本論文では、アスペクト複合動詞を取り上げ、ベトナム人学習者を対象に、オンラインでの指導を行い、指導の有無および指導法の違いによる効果を実験によって検討したものである。調査の結果、指導には効果があり、未知語には複合動詞の後項動詞と共起する語を考えさせるCA法が有効であることが明らかになった。コロナ禍でオンライン教育が一般化した現在、オンライン指導を文法、語彙教育に生かす意義は高まっている。本論文は今後こうした教育手法を考える上で参照できる貴重な研究である。　（I）

劉 羅麟　**日本語の音声の授業における学習者の母語の活用**
――学習者が得た知識面・認識面・運用面の学び

多くの日本語教師にとって的確な発音指導は難しく、特に非母語話者教師にとっては苦慮するところではないかと推察するが、本論文は、学習者と母語（中国語）を同じくする教師だからこそ可能になった発音指導の実践が報告されている。日本語の清音・濁音、ナ行音・ラ行音、拍・リズム、アクセントとそのルール、イントネーションを取り上げた授業の概要が紹介され、終了後に行った学習者アンケート・インタビューについて分析・考察されている。今後、同様の取り組みが様々な母語の学習者に行われ、その方法論が共有されることを強く期待する。　（M）